

将軍と和歌―足利義満の場合

小川 剛生

室町幕府将軍の和歌尚は、九代の義尚がとりわけ有名であるが、初代尊氏以来代々の将軍に見られることである。ここでは三代の義満の和歌事蹟について考えてみたい。

それは康暦・永徳の交、彼が公家化していく過程で和歌との係わりが顕著に見られる。『新後拾遺和歌集』は義満の執奏によって企画されているし、また永徳元年（一三八一）三月、室町殿に後円融天皇の行幸を迎えた時の歌会、同年八月任大臣後初度の歌会、ともに家での催しであり頗る盛儀であった。しかしこれらは歌壇の支配者としての事蹟といふべきで、自身がどれほど作歌に熱心であったかはあまり知られていない。

室町幕府将軍が、治天の君にかわって勅撰和歌集を撰進させる権利を握ったことは夙に知られているが、これは同時に勅撰集が下命され完成するまでのプロセスに嫌でも関与することを意味する。その一つに百首歌（応製百首）の詠進がある。将軍が応製百首を詠進することなど、鎌倉時代にはもちろん見られない。

既に『風雅和歌集』の時の貞和百首の人数には尊氏と直義が加えられたが、なかなか詠進できず披講を延引させてしまっている『圓太曆』貞和二年閏九月十日条）。自筆清書が原則であり、一首三首の懐紙短冊と違つて代作という訳にもいかず、また詠進の際の故実も不案内では、將軍兄弟にとつて大きな悩みの種であつたらう。

公家の教養を最もよく身につけたといわれる義満でも状況は似たようなものであつた。『新後拾遺和歌集』は二条為重が永徳二年（一三八二）三月二十八日に奏覧後、翌三年十一月二十八日に返納された（『代々勅撰部立』。これは義満の百首詠進が頗る遅れたことに一因があるらしい。『吉田家日次記』同年九月二十三日条に「准后御百首（四季部先立て遣さる、恋雜部今日出さる）出さるの間、今に於いては勅撰返納来月たるべし」（原漢文）と、ようやく義満の応製百首が完成したことに撰者が安堵したことが見えている。

このような有様であるから、義満が名実ともに公家社会の頂点に立つ頃に和歌事蹟が少なくなることも肯けるが、最晩年には興味深い詠がある。『教言御記』応永十四年（一四〇七）十二月二十四日条に、

一、高橋来、

我がいはほは世を宇治山にあらざればみやこのかたをたつみにぞみる

北山殿十首御哥内、耕雲庵長点を被申云々、

とある。この時、十首歌を召したらしく、その自詠である。もちろん、例の喜撰歌のパロディーである。義満は側近に対しては「御利口」、つまり軽口冗談をたたくことが常であつたと言われる。既に將軍を義持に譲り、豪奢な北山殿を営み、院政を氣取つていた義満の、稚氣に満ちた狂歌であろう。ただ、自ら北山を讀める一種の宿癡めをしたことは、権力者の詠として注意すべきであろう。また南朝の遣臣花山院長親（耕雲明魏）が早くも如才なく義満に取り入つてゐることも興味深い。

さて、この年十一月二十七日には、内裏で九十番歌合が催された。公武緇素六十名の歌人が参加する大歌合であり、事実上義満が主催者と見るべきであろう。その三十一番右、義満の「浦雪」詠は、

ききしより名もむつましく思ふなりあしりの浦につもる白雪

であつた。四句目の「あしりの浦」とは、「高嶋の足利湖をこぎ過ぎて塩津菅浦今かこぐらむ」（『万葉集』卷九・一七三四・小弁）に由来する。「足利湖」を新点以後は「あどのみなと」と訓むが、中古には「あしりのうら」の訓が通行して、これによつたものである。この歌枕は琵琶湖西岸の舟木崎、安曇川の河口一帯に比定されるが、義満との縁はなく、字面通り「足利」の名が自分には懐かしく思える、という意であろう。

ところが、「あしりのうら」は、新古今時代に僅かな用例が見られるだけで、當時はまず用いられない歌枕である。そもそも、『万葉集』の知識がなければ、「あしりのうら」から「足利」を想起するのは不可能であるから。そういう学術的なところは義満にはない。敢えてこのような名所を内裏歌合で詠んだ意図をもう少し付度したい気持ちに駆られる。

一つの推測であるが、その心中には、関東公方足利満兼の存在があつたのではないか。

関東公方とは、尊氏の次男基氏が室町幕府の出向機関である鎌倉府の主として遣されてから公方を称した家柄で、関東と陸奥出羽十ヶ国を独力で支配していた。当初は京都の幕府との分割統治が効を奏していたが、内乱が沈静化すると、かえつて

將軍に替わらんとする野望を抱き、京都との確執が絶えず、長く幕府政治のアクレス隼的存在であったといつてよい。

將軍権力が最も強大であった義満の時さえ、満兼はしばしば反抗的な態度をとった。両者対立の焦点の一つが、足利氏の名字の地である下野国足利荘であった。この地はもともと幕府の直轄領であり代官が派遣されていたが、この頃は幕府と鎌倉府との間でその管理がめまぐるしく交替し、応永十四年頃には満兼の支配に繰り入れられた(『足利市史』上)。関東公方もまた、自らのルーツとする足利荘については、ことさら幕府に対抗心を抱いていたに違いない。それは義満を刺激せずにはいられなかったようである。

鎌倉の主となった人びと―源実朝や宗尊親王、そして関東公方初代の足利基氏にも、鎌倉を詠んだ和歌があつて、それはやはり彼らの統治者意識と切り離せないものであろう。義満自身は関東に入ったことは一度もなく、これからほどなくして栄華を極めた北山殿として生涯を終えるのであるが、それでも心底ではなお名字の地へのこだわりが横たわっていたことを証する。義満の生涯の最後に詠まれた和歌が北山殿と足利荘を題材とするものであったことは、不思議な偶然である。